



# 新堀小だより

1月号

令和5年1月10日発行

元気いっぱい 夢いっぱい みんなが輝く新堀小学校  
新堀小3つの約束「心のこもったあいさつ 時を守る みんな仲よく」

<http://www.c-niiza.ed.jp/e-shinbori/>



賀正

チャレンジし、より佳き年に！

校長 若林 寿

謹賀新年、あけましておめでとうございます。昨年もコロナ禍は終息されず、教育活動の実施にあたり、ご心配やご苦労をお掛けいたしました。皆様のご理解とご協力のもと、新しい年を迎える事が出来ました。本当にありがとうございます。今年一年が、子供たち、保護者・地域の皆様にとって、より佳き年となることを心から願います。

さて、昨年3月、私が3年ぶりにアメリカから帰国し、日本の地を踏んで間もない頃のことです。「堀江謙一さん(83歳)、ヨットで単独無寄港の太平洋横断を目指し、3月26日にアメリカ・サンフランシスコを出航」という記事を見つけ、そのチャレンジにとっても驚かされるとともに、その生き方にとっても共感しました。そして、約2ヶ月後の6月4日、69日間の航海を経て遂に日本へ到着、なんと史上最高齢での偉業を達成されました。堀江さんは、1962年、23歳当時に、日本人として初めて、小型ヨットによる太平洋単独無寄港横断に成功し、そのときの記録が「太平洋ひとりぼっち」として本や映画になり、一躍有名になります。また、1974年には、日本初の小型ヨット単独無寄港世界一周にも成功し、その後も海洋冒険家として数多くの挑戦をし続けられています。

1962年(昭和37年)当時、ヨットによる外国への出国は前例がなかったため政府からパスポートを発行してもらえず、堀江青年は「No Passport」、更に「No English」、「No Money」の状態でサンフランシスコ(アメリカ合衆国)に到着します。正式な入国ではないので、直ぐに強制送還されてもしかたがない状況でした。しかし、当時のサンフランシスコ市長は、「コロンブスが強制送還されていたら、今日のアメリカ

力は存在しなかった。」と日本の青年の無謀とも思えるチャレンジを高く評価し、堀江青年をサンフランシスコの名誉市民として受け入れたのです。そのことで移民局(米国政府)も入国と1ヶ月の米国滞在を認めるという異例の措置をとることになります。そして、共感を受けたアメリカ国民からも堀江青年は称賛を浴び、現在もアメリカで「レジェンド(伝説)」と呼ばれ、敬意を表されています。日本は、戦後17年、まだまだ辺りには戦争の残照が残り、敗北の無力感が漂っていました。日本国民には世界に目をむける余裕など全くなく、堀江青年のチャレンジは、当時、大変ショッキングな出来事となります。それまで月のように遙か遠くと思っていたアメリカが、身近に感じられるようになり、希望や夢、何かにチャレンジする気持ちを抱く日本の若者が海外に雄飛する時代がやって来たのです。サンフランシスコ市長が、堀江青年に渡してくれた「名誉」は、アメリカが日本国民に贈ってくれた大きなプレゼントになったのです。

「一つのチャレンジが終われば又新たなチャレンジが……夜がめぐり朝が来るように。限りないチャレンジそのものが私の人生であります。」(堀江謙一氏)

※堀江謙一オフィシャルサイト“太平洋ひとりぼっち”参照

今年は、新堀小学校が創立50周年を迎える年でもあります。多くのチャレンジをし、様々な困難を乗り越え、素晴らしい今があります。まだまだコロナ禍の完全なる終息が見えない中ではありますが、この新しい年が、より佳き年になるよう思い切っているいろいろなことにチャレンジしていきたいと思っています。本年もよろしくお願いいたします。